
曲目解説

●ブラームス：ピアノ・ソナタ第3番 へ短調 作品5

1953年、20歳の若さで完成された作品でありながら、後の交響曲を思わせる構成や多声的書法が体现されています。あわせて、激しく燃え立つような情熱も表出されています。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ、へ短調、四分の三拍子、ソナタ形式

第1主題の最初の進行には、これ以後の作品でしばしばみられるブラームスのモットーのF-A-F (Frei aber froh “自由にしかし喜ばしく”の各語のイニシャルにもとづく)の萌芽がすでに見られます。

第2楽章 アンダンテ・エスプレッシオーヴォーアンダンテ・モルト、変イ長調、四分の二拍子、三部形式

詩人シュテルナウの「若き恋」という詩の一節が冒頭に掲げられています。

「黄昏はせまり、月は光り輝く
そこに二つの心が、愛で結ばれて
互いによりそい、抱き合う。」

第3楽章 スケルツォ、アレグロ・エネルジコートリオ、へ短調

メンデルスゾーンが最晩年の1845年頃に作曲されたとみなされているピアノトリオ第2番の終楽章の第1主題を基に主要部の主題が書かれています。中間部がコラルの様式で書かれていることも同曲の第2主題と同様です。

第4楽章 間奏曲「回想」、アンダンテ・モルト、変ロ短調、四分の二拍子 タイトルは、第2楽章同様シュテルナウの詩の題名です。

第5楽章 アレグロ・モデラート・マ・ルバート、へ短調、八分の六拍子、ロンド形式

A-B-A-C-A-結尾という形がとられています。その主題は、第3楽章のものと密接に関連しています。最後の結尾は、カノンを用いて壮大な頂点を築きあげます。

●ショパン：12の練習曲 作品25 から

・第1番 変イ長調 「エオリアン・ハープ」

両手とも流れる分散和音ですが、ポジションの移動は小さくなっています。音の列の中から何重もの旋律を浮かび上がらせる練習曲となっています。「エオリアン・ハープ」と名付けたのはシューマンと言われています。他にも「牧童」と言われることもあります。

・第7番 嬰ハ短調 「恋の二重唱」

旋律は、はじめカノンのように低声を高声が追いかけて始まりますが、すぐに別々の動きを示し、時に反発し、時に寄り添いながら続いています。その掛け合いは、あたかもオペラの二重唱を見ているかのようです。海外では「チェロ」と呼ばれることがあります。静かに始ま

った曲が中間部で情熱的な盛り上がりを見せて、後半は沈黙していくように静かに切なく消えていきます。ノクターン形式としても見ることができます。

・第12番 ハ短調 「大洋」

両手アルペジオがうねるように延々と続く中に、美しいコラール風旋律が、あたかも水中に垣間見えるかのように聞こえてきます。

- ドビュッシー：12の練習曲 から 第1番 五本の指のために（チェルニー氏による）、ハ長調
チェルニー風の無機的な音型で開始しますが、その音型の反復にすぐに異質で不協和な音が絡み始め、やがてドビュッシー独自の世界へと展開していきます。

- ドビュッシー：前奏曲集第1巻 から 第12曲 「ミンストレル」

白人が黒人に扮して歌い踊る陽気でユーモアに満ちた「ミンストレル・ショー」の情景。この曲では、ケークウォークのリズムが用いられています。これは『子供の領分』の「ゴリウォーグのケークウォーク」、あるいは教育用小品『小さな黒人』同様、当時パリのモンパルナス地区で流行していた黒人のダンス音楽に影響を受けています。ただし、ドビュッシーはジャズの影響は受けておらず、この点で後年ジャズの要素を取り入れたモーリス・ラヴェルとは異なります。

- ドビュッシー：子供の領分 から 第6曲 「ゴリウォーグのケークウォーク」

本曲集の中で一番有名な曲です。ゴリウォーグとは、フローレンス・アップトンの絵本に出てくる黒人の男の子人形のキャラクターの名前で、ケークウォークは黒人のダンスの一種です。この曲は、西洋音楽とアフリカ黒人音楽との接触の初期の例として、しばしば挙げられます。ケークウォークの中間部では、ワーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」の冒頭部分が引用されています。

- ガーシュイン：ラプソディ・イン・ブルー

ホワイトマン楽団のポール・ホワイトマンの提案を受けて、1924年、ニューヨークのエオリアンホールで開かれた「新しい音楽の試み」と題されたコンサートに向けて作曲し、そこで初演されました。

ガーシュインは、この曲を約2週間で一気に書き上げました。ただ、当時のガーシュインは、まだオーケストレーションに精通しているとはいえなかったうえに、作曲の期間が限定されているという事情も加わって、代わりにグローフェが、オーケストレーションを行ないました。グローフェは、当時、ホワイトマン楽団のピアニストであるとともに専属の編曲者を務めていました。ガーシュインが、2台のピアノを想定しながら作曲し、それを即座にグローフェがオーケストラ用に編曲していき、結局は、ガーシュイン自身が弾くピアノと小編成のジャズバンド向けの版が完成されました。その後もいくつかの版が作られています。今回は、ピアノ連弾による演奏です。